

モバイル社会白書 2007
White Paper on Mobile Society 2007



Part 2

Chapter 3

個人 Personal

子ども



2-3-0 Overview

「子ども」概要

テーマの背景

NTTドコモ「キッズケータイ」や au「ジュニアケータイ」、ウィルコム「papipo!」など各携帯電話事業者から子どもの利用を想定した携帯電話が発売され、2006 年は「子ども向け携帯電話元年」となった。

これまで、プリペイド式携帯電話などの使用上限額が決められたものや、PHS の位置検索機能「P-doco?」、GPS 機能「ココセコム」などの居場所の確認用に特化したものが「子ども向け」とされていたが、2006 年に発売された子ども向け携帯電話は、通話、メールなどの連絡手段としての機能を備えていることはもちろん、防犯ブザーや GPS 機能が搭載され、子どもの安全を守り、親子の安心をつなぐコミュニケーションツールとして登場した。

また、受け皿となる社会においても、子どもの携帯保有をより安全なものにする検討が進められている。

文部科学省の中央教育審議会は、「未成年の携帯電話の契約の際には、有害サイトへの接続を規制するフィルタリング機能を標準装備する」「利用に関する親権者の意思を確実に確認する」などの答申をまとめた。

では、十分に社会性を発達させていない子どもたちが、早い時期に「携帯電話」を手にする事で、実際に子どものコミュニケーション様式にはどのような変化が起こっているのだろうか。

本章では、小学生から高校生までの子どもの携帯電話の利用現状を、子どもとその保護者をセットとしたインターネット調査と、学校の教員のインターネット調査から明らかにし、問題点を検討していく。特に小学生については、3～4 年生と 5～6 年生に分け、それぞれの違いを細かく見ていくこととする。

テーマの特徴とトピックス

本年度に特徴的なトピックスとしては、保有率の上昇とと

もに、親子の間だけでなく子ども同士の携帯電話のコミュニケーションも活発になってきている点、子どもの保有する携帯端末の多機能化に伴って通話やメール以外の機能利用率が上昇している点が挙げられる。

そして、携帯電話が多機能化する中で、親子の意識の間に携帯電話利用に関するギャップが生まれている。親たち大人側は「有害サイトをはじめとしたインターネットの接続の規制は率先して取り組むべき優先事項である」と認識している一方で、子ども自身は、子どものコミュニケーションの中心である「メール」について悩みを抱えているのである。

子どもたち同士のメールコミュニケーションでは、「30 分以内にメールを返信する」ということを半ば「常識」とする風潮がある。「メールを返信する」という行為自体が、子どもにとって重要な事項となっている中、現状のマナー教育やインターネット閲覧規制だけでなく、育成の観点からメールの使い方に関する注意喚起やモラル教育を含めた社会的ケアが求められている。

今後の展望

子どもの携帯電話保有の低年齢化や普及がさらに進むことで、子どもの生活習慣や生活環境に変化が生じ、携帯電話メールの普及によるコミュニケーションの変質が顕在化してくるだろう。その中で懸念される事項は 2 つある。

1 つ目は、携帯電話メールをすぐ返信しなくてはならないという風潮があることである。携帯電話によって誰かとつながっていることを感じるといった現象は、「ケータイ依存」と言われているが、メールをすぐ返信しないことによって生まれる対人関係の摩擦に関して悩む子どもが増えるかもしれない。

2 つ目は、子どもたちのコミュニケーションにおいて、「文字を打って意思を伝える」ということが多くなっていることである。対面したコミュニケーションでは、「こんなことを言ったら相手が傷つく・相手が喜ぶ」など、目の前にいる相手の

表情や会話の「間(ま)」などから自分が言った言葉の意味を学び、その善し悪しを習得していくことができる。しかし、メールによるコミュニケーションは、相手の反応を見ないまま、「即時に文字を打つ」ことで言葉や思いを伝達していく。メールを媒介としたバーチャルなコミュニケーションの中で、無責任

な言葉のやり取りが増大することも考えられる。

携帯電話メールの現状と、それによって実際に生じている子どもたちの心の問題を、親である保護者と学校などの教育機関の両方で子ども目線に立ってきちんと認識していくことが重要である。

2-3-1	子どもの携帯電話概況	Key Words
	子どもの携帯電話保有率は年々上昇しているが、昨年度の調査では、小学生では 2～3 割、中学生で約半数、高校生は 9 割を超えるに至っている。機種・よく利用する機能は、年齢で大きな違いがある。昨年度、低年齢層の子どものターゲットに各メーカーからいっせいに発売された、安全・安心にポイントを置いた「子ども向け」の専用端末も紹介。	■ 携帯電話の保有率 ■ 子ども向け携帯電話 ■ 携帯電話の利用状況

2-3-2	携帯電話に関する子どもと親の意識のギャップ	Key Words
	低年齢層の子どもに対しては「安全・安心」、高年齢層では料金や有害サイトへのアクセスなどが、親が危惧するところだが、使用する子どもの側の意識はかなり異なっている。特に高校生では、フィルタリング機能利用率は低いものの、実際のインターネット利用において、親が考える以上に自主的な注意を配っているという興味深い調査結果が出ている。	■ 安全 ■ 安心 ■ ルール ■ インターネットのアクセス制限 ■ 犯罪 ■ 出会い系サイト ■ 家族

2-3-3	子どもの携帯電話メールコミュニティ	Key Words
	新しい友達ができると、まず携帯の番号・メールアドレスを伝えるという者が中学生で 7～9 割と、子どものコミュニティで対人関係を広げていく際に携帯電話は不可欠のツールになっている。反面、年齢が上がるほど 1 日の生活時間にインターネット・携帯電話利用の占める割合は高くなり、リアルなコミュニケーションが減っていくことがわかる。	■ 携帯型ゲーム機 ■ コミュニティ ■ 生活習慣 ■ パーソナルメディア ■ リアル ■ コミュニケーション ■ バーチャル ■ SNS ■ 子どもの独自ルール

2-3-4	携帯電話を手にした子どもたちの諸問題	Key Words
	大勢の子どもが「携帯電話は楽しい」と言う一方で、携帯電話を介したいじめやトラブルも無視できない状況にある。小中高の学校教師を対象に行なったアンケート結果を交え、具体的な問題と教育の場全体で取り組むべき方向性を考察する。教師によるフリーアンサーでは、携帯電話の使い方やマナーなどよりモラル教育が重要だという意見も出された。	■ 子ども目線 ■ 学校 ■ いじめ ■ ルール ■ モラル ■ 社会的ケア

参考文献

■ 矢野直明、サイバーリテラシー研究所：「子どもと親と教師のためのサイバーリテラシー—— ネット社会で身につける正しい判断力」合同出版、2007年



2-3-1 Mobile Phone Use of Children

子どもの携帯電話概況

今回、小学校3年生から高校3年生までの子どもたちの携帯電話の保有状況の現状を把握するために、全国で「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」を行なった(調査概要については章末の付録を参照)。

携帯電話の保有状況

保有率

今回対象の子どもの携帯電話の保有率を小中高別で見ると、「自分専用の携帯電話」を1台持っている割合は、小学校3～4年生18.3%、小学校5～6年生24.3%、中学生47.7%、高校生92.8%となっており、小中高と学年が上がるごとの保有率の差が顕著である(資料2-3-01)。

また、複数端末の保有率は、小学生0%、中学生0.3%、高校生1.2%と低い結果であった。

さらに、家族共有での保有率を見ると、小学校3～4年生3.0%、小学校5～6年生4.3%、中学生5.3%、高校生1.2%と共用率は低く、自分専用の携帯電話保有率の低い小・中学生でもあまり家族と共用していないことがわかる。

次に、資料2-3-02のとおり、学年別で携帯電話保有率を細かく見ていくと、小学生では5年生が20.4%、6年生が27.8%と、5年生と6年生の保有率の格差、中学生では2年生が42.1%、3年生が60.9%と、小・中学生ともに最終学年での保有率の上昇率が顕著である。しかし、高校生になると保有率が1年生で90%を超え、学年による差は見られない。

保有開始時期

小中高別の保有開始時期は、資料2-3-03のとおりである。

高校生では、保有開始時期は高校1年以降が43.6%、中学校の3年の間が44.7%と、中学生以降で保有する者が多い。

また、中学生では、中学校の3年の間に保有を始めたとする者が62.2%となっており、高校生、中学生ともに小学生の時から持ち始めた者は少ない。

続いて小学生を見ると、小学校5～6年生では、保有開始時期が5～6年生という割合は59.8%となっており、また、小学校3～4年生では、3～4年生という割合が61.6%と多い。このことから見て、小学生の時から携帯電話を持つようになっている傾向は、ここ最近の傾向であると言え、保有時期が低年齢化していると考えられる。

保有携帯電話事業者と保有機種

資料2-3-04の「保有携帯電話事業者」のとおり、携帯電話・PHSにおける子ども市場の携帯電話事業者シェアは、NTTドコモが36.5%、au+ツーカーが44.5%、ソフトバンクが17.2%、ウィルコムが1.7%である。この調査時期の携帯電話・PHS市場全体シェアを電気通信事業者協会(TCA)2006年12月データから見てみると、NTTドコモが52.8%、au+ツーカーが27.3%、ソフトバンクが15.5%、ウィルコムが4.4%となっており、これと比較すると、子ども市場ではau+ツーカーのシェアが高いことがわかる。

次に、資料2-3-05の「保有機種」を見ると、小学校3～4年生では、NTTドコモ、auともにそれぞれ「キッズケータイ(資料2-3-06)」「注1」「ジュニアケータイ(資料2-3-07)」「注2」などの子ども向け携帯電話のシェアが2割を超えて高く、これらの機

種が小学校3～4年生などの低学年の子どもを持つ親のニーズと合致したと考えられる。また、ウィルコムの子ども向けPHS「papipo! (資料2-3-08)」「注3」も1.4%の保有率となっている。一方、中学生、高校生では、NTTドコモ、auともに高スペック機種(NTTドコモ FOMA 9シリーズやau WINシリーズ)の保有率が高い。

携帯電話の利用状況

搭載機能と利用率

子ども向け携帯電話の登場以前は、通話機能やメール機能のないNTTドコモ「P-doco? (資料2-3-09)」「注4」、セコム「ココセコム(資料2-3-10)」「注5」のような位置検索機能に特化したものが「子ども向け」とされるが多かったが、現在子どもたちの利用している携帯電話にはどのような機能が搭載されているのだろうか。

資料2-3-11のとおり、子どもの持つ携帯電話は、「メール」「カメラ・写真撮影機能」などの搭載率が8割を超えており、これらの機能は子どもの携帯電話にとって標準的な機能となっている。また、資料2-3-12で携帯電話の利用状況を見ると、「メール」と「カメラ・写真撮影機能」の利用率は6～9割強と、小中高の学年に関係なく利用率が高い。一方、「インターネッ

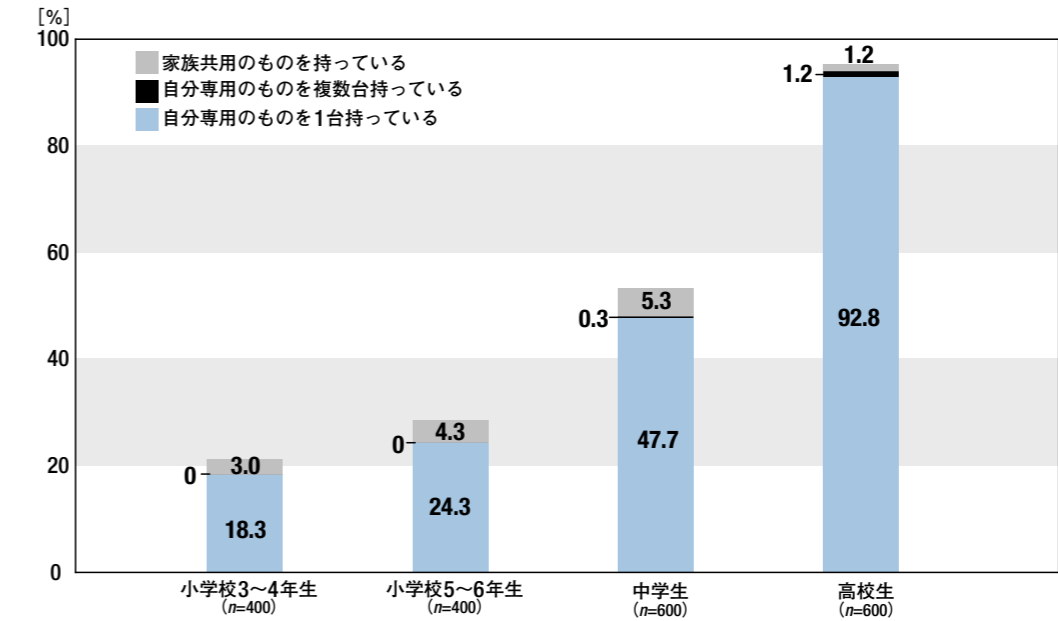
ト機能」は、中学生以上では搭載率が9割を超えているが、小学校では3～4年生76.7%、5～6年生84.5%であり、利用率は、小学校3～4年生15.1%、5～6年生34.0%、中学生62.8%、高校生77.8%となっており、小学生と中学生・高校生での差が顕著である。また、利用率から見て、インターネット機能は、小学生では搭載はされていてもあまり利用されていない機能であることがわかる。

そのほかの搭載機能の傾向を資料2-3-11で見ていくと、小学校3～4年生は、「キッズケータイ」や「ジュニアケータイ」の保有率が高いこともあり、「GPS」の搭載率が6割と高く、利用率は3割となっている。

また、中学生、高校生の携帯電話では、小学校3～4年生と異なりGPS機能の搭載率が2割強と低い一方で、高スペック機種の保有率が高いこともあり、「音楽」「ゲーム」などのエンターテインメント機能の搭載率が6～8割と高い。また、資料2-3-12で利用率を見ると音楽約6～7割、ゲーム約4～5割と高い。

これらの結果から、小学生の携帯電話と中学生・高校生の携帯電話では、搭載機能や利用機能が大きく異なっていると考えられる。

資料2-3-01 携帯電話保有率(単回答)



出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」

参考資料

■ 電気通信事業者協会
http://www.tca.or.jp/

クロスリファレンス

● 子ども向け携帯電話
→ 2-1-3

注1— NTTドコモ キッズケータイ
NTTドコモから2006年3月に発売された子ども向け携帯電話。GPS機能を使った位置確認サービス「イマドコサーチ」に対応。iモードやパソコンからキッズケータイ保有者の位置を確認できる。また、防犯ブザーを搭載。ブザーと連動して登録した相手に音声通話が発信される。電池パックを専用工具で固定するなど、故意に通信不能な状態にすることを防止。有害サイト閲覧制限サービスや子ども向け料金プランにも対応している。

注2— au ジュニアケータイ
auから2006年2月に発売された子ども向け携帯電話。GPS機能を使った位置確認サービス「安心ナビ」に対応。EZwebやパソコンからジュニアケータイ保有者の位置を確認できるほか、万が一の事態には、GPSで確認した位置に現場急行する「ココセコム」や「ヘルプネット」などのサービスにも対応。防犯ブザーを搭載。ブザー

と連動して登録した相手に位置確認メールが自動発信される。電池パックが本体に固定されており、強制的な電源オフを防止。有害サイト閲覧制限サービスや子ども向け料金プランにも対応している。

注3— ウィルコム papipo!
ウィルコムから2006年6月に発売された子ども向け携帯電話。ウィルコムのマイクロセルネットワークを利用し、携帯電話やパソコンから保有者の位置を確認できるほか、メール文面上でも大まかな位置情報を住所表記で通知。登録した相手としか通話やメールができない「安心モード」を搭載。強制的な電池の抜き取りを防ぐため、電池パックは専用工具で固定されている。

注4— NTTドコモ P-doco?
NTTドコモのPHSの基地局を利用して位置を割り出す「いまどこサービス」専用端末。保有者の位置をパソコンや携帯電話から確認できる。

資料2-3-07 au ジュニアケータイ



出所：KDDI 広報部

資料2-3-09 NTTドコモ P-doco? mini



出所：NTT ドコモ広報部

資料2-3-08 ウィルコム papipo!



出所：ウィルコム広報部

資料2-3-10 セコム ココセコム(ココセコム最小端末)



出所：セコム広報室

資料2-3-11 機能の搭載率(複数回答)

	回答数	メール	機能 インターネット	機能 カメラ・写真撮影	動画撮影機能	おサイフケータイ	GPS	テレビ電話	テレビ機能	着うた・音楽ダウンロード機能	機能 本や漫画を読む	辞書を引く機能	ゲーム	QRコード
小学校 3～4年生	73	91.8	76.7	80.8	65.8	9.6	63.0	20.5	8.2	46.6	13.7	27.4	42.5	23.3
小学校 5～6年生	97	97.9	84.5	92.8	63.9	9.3	38.1	23.7	6.2	57.7	16.5	27.8	58.8	41.2
中学生	288	99.3	94.1	96.9	77.4	21.2	24.0	21.9	9.7	79.5	20.5	31.9	67.7	45.5
高校生	564	99.6	97.0	97.9	81.6	28.4	23.0	25.5	11.0	84.8	33.0	42.2	76.1	51.1

出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」

資料2-3-12 機能の利用率(複数回答)

	回答数	メール	機能 インターネット機能 (iモードやEZweb など)	機能 カメラ・写真撮影	動画撮影機能	おサイフケータイ (Felica機能)	GPS	テレビ電話	テレビ (アナログ、ワンセク)	着うた・音楽ダウンロード機能	機能 本や漫画を読む	辞書を引く機能	ゲーム	QRコード	当てはまるもの はない
小学校 3～4年生	73	76.7	15.1	60.3	42.5	1.4	31.5	5.5	2.7	11.0	1.4	12.3	17.8	5.5	12.3
小学校 5～6年生	97	87.6	34.0	71.1	25.8	1.0	16.5	4.1	4.1	24.7	4.1	8.2	27.8	10.3	2.1
中学生	288	96.9	62.8	85.1	41.0	3.1	4.2	4.2	6.3	58.3	5.2	13.9	35.4	15.6	1.0
高校生	564	98.9	77.8	84.9	46.1	1.2	5.0	4.4	8.3	68.8	12.4	19.9	49.5	20.4	0.5

出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」

資料2-3-13 子どもの携帯電話に搭載されている機能の利用率(複数回答)

		メール	機能 インターネット機能 (iモードやEZweb など)	写真撮影機能	動画撮影機能	おサイフケータイ (Felica機能)	GPS	テレビ電話	テレビ (アナログ、ワンセク)	着うた・音楽ダウンロード機能	機能 本や漫画を読む	辞書を引く機能	ゲーム	QRコード
小学校 3～4年生	%	83.6	19.6	74.6	64.6	14.3	50.0	26.7	33.3	23.5	10.0	45.0	41.9	23.5
	n	(67)	(56)	(59)	(48)	(7)	(46)	(15)	(6)	(34)	(10)	(20)	(31)	(17)
小学校 5～6年生	%	89.5	40.2	76.7	40.3	11.1	43.2	17.4	66.7	42.9	25.0	29.6	47.4	25.0
	n	(95)	(82)	(90)	(62)	(9)	(37)	(23)	(6)	(56)	(16)	(27)	(57)	(40)
中学生	%	97.6	66.8	87.8	52.9	14.8	17.4	19.1	64.3	73.4	25.4	43.5	52.3	34.4
	n	(286)	(271)	(279)	(223)	(61)	(69)	(63)	(28)	(229)	(59)	(92)	(195)	(131)
高校生	%	99.3	80.3	86.8	56.5	4.4	21.5	17.4	75.8	81.2	37.6	47.1	65.0	39.9
	n	(562)	(547)	(552)	(460)	(160)	(130)	(144)	(62)	(478)	(186)	(238)	(429)	(288)

出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」

※()内は母数

Part 2 Personal / 個人
Chapter 3 Children / 子ども

2-3-2 Perception Gap on Mobile Phone Use between Parents and Children

携帯電話に関する子どもと親の意識のギャップ

保有に関する親子間のギャップ

携帯電話の購入決定まで

子どもの携帯電話の購入はどのように決定されているのだろうか。

全国で行なった「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」(調査概要については章末の付録を参照)によると、資料2-3-14のとおり、「別に自分は欲しくなかったが、親が薦めて買ってくれた」とするのが、小学校3～4年生で23.3%、小学校5～6年生では18.6%と、小学生では、中学生・高校生と比べて高い割合となっている。親側の「持たせたい」という意向も小学生のうちは強いことがわかる。

一方で、中学生・高校生は「自分が欲しかった」といった理由が6割以上と高くなっており、携帯電話保有に対する主体性が現れてくる。

親・子の携帯電話の保有開始理由

親側の保有させた理由、子ども側の欲しいと思った理由は

どのようなものなのだろうか。親、子それぞれの保有の理由は資料2-3-15のとおりである。

親が携帯電話を持たせた理由としては、小学校から高校まで共通して「子どもといつでも連絡が取れるようにしたかった」が最も多い。特に小学生の子どもを持つ親では6割弱と高く、中学生・高校生に比べてその高さが顕著であり、子どもの安全を守り、親子の安心をつなぐツールとしての役割を携帯電話に期待していると考えられる。

一方、子どもを見ると、小学生までは子どもも親と同じ傾向にあるが、「上記に関係なくただ欲しかった」という理由も多く挙がっており、携帯電話を所有することに対する漠然とした意向の強さも見られる。

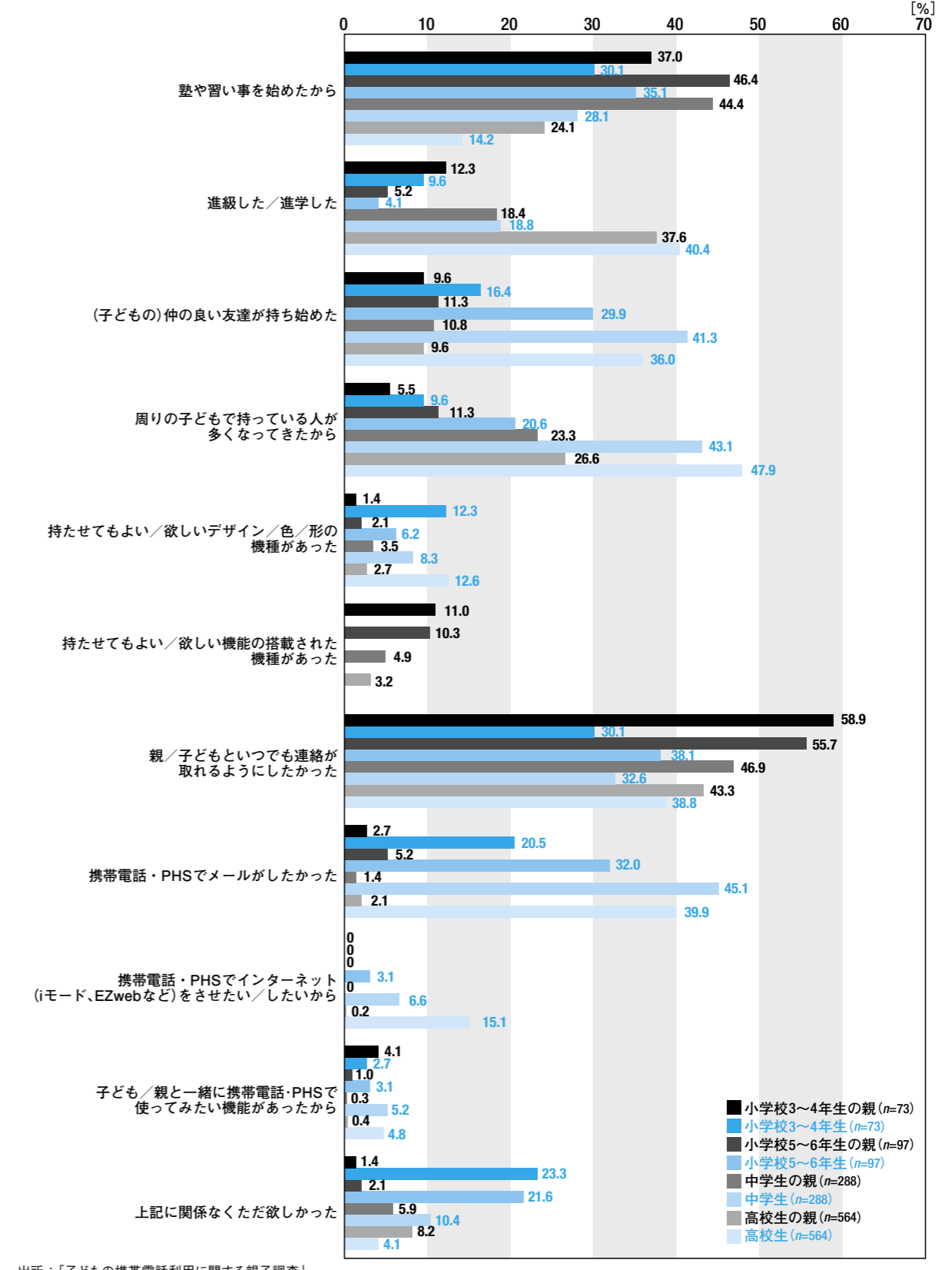
一方、中学生・高校生では、「仲の良い友達が持ち始めた」「周りの子どもで持っている人が多くなってきたから」など周囲の環境が強いモチベーションになっており、親側の「いつでも連絡を取りたいから持たせたい」という思いと、子どもの「友達と連絡を取りたい」という思いの間で、親子間の携帯電話保有をめぐるギャップが特に顕著に出ている。

資料2-3-14 携帯電話の購入決定まで(単回答) [%]

	回答数	別に自分は欲しくなかったが、親が薦めて買ってくれた	自分も欲しいと思っていたが、親が薦めて買ってくれた	自分が欲しかったので頼んで買ってもらった	自分が欲しくて、自分で購入した
小学校3～4年生	73	23.3	50.7	26.0	0
小学校5～6年生	97	18.6	51.5	29.9	0
中学生	288	8.3	29.5	60.8	1.4
高校生	564	3.7	25.2	65.2	5.9

出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」

資料2-3-15 親・子の携帯電話保有開始理由(複数回答)



出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」

参考資料

クロスリファレンス

- 安全 → 3-4-2
- 安心 → 3-4-2

機種決定

「機種決定者」については資料2-3-23のとおりである。機種決定では、携帯電話事業者の決定と異なり、小学校3～4年生、5～6年生で4割強が「自分」で決めたとしており、携帯電話事業者の決定に比べて子どもにも裁量の権限が与えられていることがわかる。また、中学生、高校生以上では7割以上が機種を選ぶのは「自分」としており、ケータイ購入に対する関与度が非常に高い。

子どもに比較的選択の自主性が与えられている機種の選択重視ポイントは資料2-3-24のとおりである。この数値を見ると、小中高といった学年に関係なく、共通して機能性よりも「色」「形」などの見た目が重要な機種決定要素になっていることがわかる。しかし、高校生では「色」64.4%、「機能」61.5%、「形」58.5%となっており、中学生以下の子どもと異なり、特に高校生では機能も購入時の重要な要素となっている点が特徴的である。

トに関する危機意識が低いことや、親よりも子どものほうがインターネットのサイトアクセスに注意を払っていることなどが影響していると考えられる。

また、フィルタリング機能については、文部科学省の中央教育審議会[注7]の「未成年の携帯電話の契約の際には、有害サイトへの接続を規制するフィルタリング機能を標準装備する」「利用に関する親権者の意思を確実に確認する」などの答申がまとめられており、近く、携帯電話事業者はこういった要請に対して業界として統一した対応が求められる。

携帯電話事業者・機種決定

携帯電話事業者の決定

資料2-3-22のとおり、携帯電話事業者の決定は全般的に家族の影響を受けており、小学生では、「自分以外の家族(親や兄弟)」とする者が9割と非常に高く、親や兄弟の影響が大きい。しかし、高校生では家族が58.2%、「自分」とする者が40.1%と、家族に縛られることなくその他の事情で決定している者も多いことがわかる。

資料2-3-16 購入時の約束の有無(単回答) [%]

	回答数	約束をした	特に約束はしていない
小学校3～4年生	73	74.0	26.0
小学校5～6年生	97	75.3	24.7
中学生	288	75.7	24.3
高校生	564	71.8	28.2

出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」

資料2-3-17 約束の内容(複数回答) [%]

	回答数	料金の上限に関する約束	使う場所に関する約束	使う相手に関する約束	使う機能に関する約束	閲覧するインターネットサイトの種類に関する約束	使う時間に関する約束	その他	反応数合計
小学校3～4年生	54	20.4	42.6	74.1	68.5	18.5	13.0	3.7	240.7
小学校5～6年生	73	43.8	27.4	61.6	54.8	35.6	17.8	6.8	247.9
中学生	218	74.3	27.1	31.2	42.7	43.1	27.1	6.4	251.8
高校生	405	86.7	27.2	18.3	21.0	29.9	18.8	2.2	204.0

出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」

※反応数合計：この値が大きいほど当てはまる約束事が多い

参考資料

- クロスリファレンス
- ルール
→ 2-3-4
→ 3-4-1
 - 犯罪
→ 3-3-2
→ 3-4-2
→ 3-6-2
→ 3-6-3
 - 家族
→ 2-1-3

42.3%、「着うた・音楽ダウンロード」19.0%、「ゲーム」13.4%、「おサイフケータイ」9.7%と続いており、親の「使用を制限したい」という思いほど、子どもは「特に注意を受けていない」と認識しており、あまり使用を制限されているとは思っていないことがわかる(資料2-3-19)。

特筆すべき傾向としては、「インターネット」利用に関しての意識がある。それは、親の使用制限意向の強くない高校生でさえも「親から使用を注意されている機能」として31.7%が「インターネット」を挙げており、インターネットのアクセス制限など、インターネット利用に関する注意意識が子ども全体に浸透していることがわかる。

機能利用に関する親子間意識のギャップ

上記の親と子どものそれぞれの機能利用に対する意識をギャップとしてまとめたのが資料2-3-20である。

親の使用を危惧する意識以上に、子どものほうが親に使用に当たって注意を受けていると意識している度合いの強いものを()で示した。

小学校3～4年生では全般的に親の意識が子どもを上回っている結果となっているが、5～6年生となると「メール」で9.3%、「カメラ」3.1%と子どもの利用注意意識が親を上回り、これらの使用に関して自主的に注意を払っていることがわかる。

中学生では、「メール」が6.9%、「インターネット機能」15.6%、「着うた・音楽ダウンロード機能」4.5%、高校生では「メール」5.0%、「インターネット機能」12.1%といった結果となっており、子ども自身がこれらの機能の利用に際して親以上に注意を配っているのがわかる。

フィルタリング機能の利用率

携帯電話のURLフィルタリング機能[注6]の利用率は資料2-3-21のとおりである。小学校では、3～4年、5～6年ともに4割を超えて利用率が高くなっているが、中学、高校と年齢が上がるに従って利用率は低くなり、高校生ではわずか約7%にとどまる。

小学生では、親・子ども、何らかの**犯罪**に巻き込まれるなどの不安や**出会い系サイト**へのアクセスに対して危険意識の高さがこの利用率に表われた形となっているが、中学生・高校生の利用率を見ると小学生に比べて顕著に低くなっており、中学生で20.5%、高校生ではわずか7.1%という結果であった。

この利用率の背景として、中学生以上の親側のインターネッ

利用に当たっての親子間のギャップ

保有に当たっての約束事

保有開始理由は小中高で大きく異なるが、持たせる時に「子どもと使い方について約束をする」とする親は小中高の学年にかかわらず7割以上と多く、子どもとの間に何かしらの利用に当たっての**ルール**があり、子どもが携帯電話を保有することについての親の不安は子どもの学年にかかわらず強いことがわかる(資料2-3-16)。

しかし、親子間の約束事の内容は、小中高で大きく異なる(資料2-3-17)。小学生のうちは3～4年生、5～6年生とも「使う機能」「使う相手」に関する事項が5～7割と高く、「使い方や使う内容」を制限するものが中心であるが、中学生、高校生では使いすぎなどの「料金」に関する約束が7～8割と高くなっている。

特に、親離れ・子離れの狭間にある中学生は、料金に加えて、「使用時間」「インターネットの閲覧」など、使用に当たって多くの約束事を課されており、子どもの中で携帯電話の使用に関して親の関与が最も大きい時期にある。

機能利用に関する親と子の意識

多機能化の進む子どもの携帯電話の中で、親に「子どもに使わせたくない機能があるかどうか」を聞いた結果は、資料2-3-18のとおりである。特に小学生の親においては3～4年生、5～6年生とも、「使わせたくない機能は特になし」とする者はわずか約5%と、ほとんどの親が何らかの理由で使用させたくない機能があることがわかった。

親全体で、「子どもの使用に当たって最も危惧している」機能を見てみると1位は、「おサイフケータイ」68.4%。次いで「ゲーム」36.1%、「テレビ電話」34.6%、「インターネット」34.1%、「本や漫画の閲覧」33.0%などが上位に並ぶ。利用に際して子どもが携帯電話を紛失すること、料金、有害サイトへのアクセスなどを危惧していることがうかがえる。

小中高別で見ても、「おサイフケータイ」が「使用に当たって最も危惧している機能である」のはどの学年も共通である。おサイフケータイ機能に次いで使わせたくない機能としては、小学生の親では、「インターネット」となっているが、中学生・高校生では、「インターネット」よりも「ゲーム」「テレビ電話」などの機能が上位に上がっており、意識の違いが表われている。

今度は、「親に使用を注意されている」と感じている機能を子ども全体で見ると、「インターネット」42.8%、「特になし」

注6 — フィルタリング機能
利用者の意思によって、青少年にとって有害とされるジャンルのWeb情報へのアクセスを自動的に遮断することができる技術。
注7 — 中央教育審議会
2001年1月6日付で文部科学省に設置された機関。主に、文部科学大臣の諮問に応じて、教育の振興、人材育成、スポーツ振興などの重要事項に関する調査審議を行ない、文部科学大臣に意見を述べる役割を担う。5つの分科会が設けられており、それぞれの課題や性別に審議を行なっている。5つの分科会は、教育制度分科会、生涯学習分科会、初等中等教育分科会、大学分科会、スポーツ・青少年分科会。

資料2-3-18 親が子どもの使用を危惧している機能 [%]

順位	全体 1,022		小学校3～4年生 73			小学校5～6年生 97			中学生 288			高校生 564		
	1位	おサイフケータイ	68.4	おサイフケータイ	83.6	おサイフケータイ	81.4	おサイフケータイ	74.7	おサイフケータイ	61.0			
2位	ゲーム	36.1	インターネット	78.1	インターネット	64.9	テレビ電話	43.4	ゲーム	27.1				
3位	テレビ電話	34.6	本や漫画を読む機能	69.9	本や漫画を読む機能	53.6	ゲーム	43.1	特になし	26.8				
4位	インターネット	34.1	ゲーム	63.0	ゲーム	47.4	インターネット	41.0	テレビ電話	26.4				
5位	本や漫画を読む機能	33.0	テレビ電話	58.9	着うた・音楽ダウンロード機能	39.2	本や漫画を読む機能	38.9	本や漫画を読む機能	21.6				
—	特になし	18.4	特になし	4.1	特になし	5.2	特になし	10.1	特になし	26.8				

出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」

資料2-3-19 子どもが注意されていると感じる機能(複数回答) [%]

順位	全体 1,022		小学校3～4年生 73			小学校5～6年生 97			中学生 288			高校生 564		
	1位	インターネット	42.8	インターネット	54.8	インターネット	56.7	インターネット	56.6	特になし	52.7			
2位	特になし	42.3	特になし	32.9	着うた・音楽ダウンロード機能	27.8	特になし	30.2	インターネット	31.7				
3位	着うた・音楽ダウンロード機能	19.0	着うた・音楽ダウンロード機能	27.4	特になし	24.7	着うた・音楽ダウンロード機能	28.1	着うた・音楽ダウンロード機能	11.7				
4位	ゲーム	13.4	ゲーム	19.2	メール	18.6	ゲーム	17.7	おサイフケータイ	10.5				
5位	おサイフケータイ	9.7	メール	17.8	ゲーム	16.5	おサイフケータイ	11.1	ゲーム	9.9				

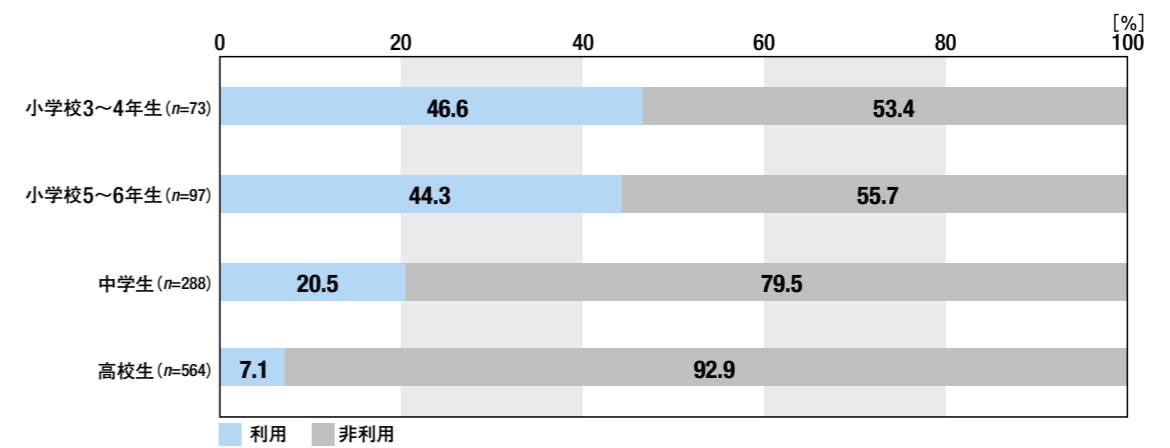
出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」

資料2-3-20 親が使用を危惧している機能と子どもが認識している要注意機能のギャップ [%]

機能	小学校3～4年生 73			小学校5～6年生 97			中学生 288			高校生 564		
	親	子ども	差	親	子ども	差	親	子ども	差	親	子ども	差
	メール	17.8	17.8	0	9.3	18.6	(9.3)	3.8	10.8	(6.9)	1.4	6.4
インターネット機能	78.1	54.8	23.3	64.9	56.7	8.2	41.0	56.6	(15.6)	19.7	31.7	(12.1)
カメラ・写真撮影機能	16.4	6.9	9.6	3.1	6.2	(3.1)	3.5	2.1	1.4	1.1	1.4	(0.4)
動画撮影機能	15.1	6.9	8.2	6.2	2.1	4.1	6.9	1.4	5.6	3.4	1.4	2.0
おサイフケータイ(FeliCa機能)	83.6	5.5	78.1	81.4	4.1	77.3	74.7	11.1	63.5	61.0	10.5	50.5
GPS	9.6	8.2	1.4	6.2	2.1	4.1	3.1	1.7	1.4	2.7	0.9	1.8
テレビ電話	58.9	6.8	52.1	38.1	11.3	26.8	43.4	5.6	37.8	26.4	4.3	22.2
テレビ(アナログ・ワンセグ)	58.9	2.7	56.2	36.1	1.0	35.1	31.3	0.7	30.6	19.9	0.4	19.5
着うた・音楽ダウンロード機能	57.5	27.4	30.1	39.2	27.8	11.3	23.6	28.1	(4.5)	11.7	11.7	0
本や漫画を読む機能	69.9	8.2	61.6	53.6	5.2	48.5	38.9	2.8	36.1	21.6	2.5	19.1
辞書を引く機能	24.7	4.1	20.5	10.3	2.1	8.2	5.9	0	5.9	2.5	0.7	1.8
ゲーム	63.0	19.2	43.8	47.4	16.5	30.9	43.1	17.7	25.3	27.1	9.9	17.2
QRコード	38.4	4.1	34.2	24.7	4.1	20.6	12.8	2.1	10.8	5.1	1.1	4.1
特になし	4.1	32.9	(28.8)	5.2	24.7	(19.6)	10.1	30.2	(20.1)	26.8	52.7	(25.9)
反応数総計	595.9	205.5	—	425.8	182.5	—	343.1	170.8	—	230.7	135.5	—

出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」

資料2-3-21 フィルタリング機能の利用率(単回答) [%]



出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」

資料2-3-22 携帯電話事業者の決定者(単回答) [%]

年齢層	回答数	自分	自分以外の家族(親や兄弟)	自分・家族以外の人
小学校3～4年生	73	5.5	90.4	4.1
小学校5～6年生	97	8.2	89.7	2.1
中学生	288	22.2	76.0	1.7
高校生	564	40.1	58.2	1.8

出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」

資料2-3-23 機種決定者(単回答) [%]

年齢層	回答数	自分	自分以外の家族(親や兄弟)	自分・家族以外の人
小学校3～4年生	73	42.5	50.7	6.9
小学校5～6年生	97	43.3	55.7	1.0
中学生	288	72.6	26.7	0.7
高校生	564	89.5	9.9	0.5

出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」

資料2-3-24 携帯電話購入時選択視点(複数回答) [%]

年齢層	回答数	色	形	大きさ	機能	カメラの画素	ゲーム	価格	CM	特になし	自分では選んでいない	その他
小学校3～4年生	73	58.9	35.6	11.0	16.4	2.7	4.1	5.5	5.5	9.6	24.7	2.7
小学校5～6年生	97	56.7	44.3	22.7	24.7	1.0	1.0	12.4	1.0	1.0	28.9	0
中学生	288	69.4	58.3	21.2	43.8	11.1	4.2	19.1	1.4	1.7	12.5	3.5
高校生	564	64.4	58.5	21.5	61.5	17.0	5.1	21.3	1.2	3.9	3.5	1.2

出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」

2-3-3 Mobile Messaging Community of Children

子どもの携帯電話メールコミュニティ

子どもを取り巻く情報メディア環境

情報機器の保有率と接触時期

情報の溢れた現代においては、実際の対人関係に加えて、情報メディアがコミュニケーションにおいて重要な役割を果たしている。ここでは、全国で行なった「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」（調査概要については章末の付録を参照）をもとに、子どもたちにおける情報メディアの位置付けを携帯電話を中心に見てみる。

資料2-3-25は、携帯電話のほか、テレビ、パソコン、家庭用ゲーム機、**携帯型ゲーム機**など、「自分専用の情報機器の保有率」を小中高別にまとめたものである。

「自分専用の情報機器の保有率」が最も高い情報メディアは、中学生までは「**携帯型ゲーム機**」が5割強と最も高い。

しかし、高校生では携帯電話の保有率が92.8%とほぼ1人に1台の情報メディアになっており、「**携帯型ゲーム機**」の約2倍となっている。

また、これらのメディアの使用開始時期は資料2-3-26のとおりである。ここでは、いつ頃これらのメディアと接触したかという視点で比較するために、まず「就学前での使用開始率」で各情報メディアを比較してみる。

「テレビ」は小中高別で見て、いずれも就学前の使用率が6割を超えて高く、ほかのメディアに比べて子どもの成長段階において早い時期に接触するメディアであることがわかる。

「パソコン」の就学前使用開始率は、小学校3～4年生で4割、小学校5～6年生では2割強、中学生は1割強、高校生は1割弱となっており、小学生では就学前の使用率が高いが、

大半が就学後に使用を開始するメディアであることがわかる。また、パソコンも携帯電話と同様、使用開始時期の低年齢化が進んでいる。

また、ゲームでは、「家庭用ゲーム機」の就学前使用開始率は小学校3～4年生で5割弱、小学校5～6年生で3割強、中学生・高校生で2割となっており、パソコンと比較すると就学前使用開始率が高い。一方、「**携帯型ゲーム機**」は学年別の大きな差はなく2割前後となっており、全体的に家庭用ゲーム機よりも使用開始時期が遅い。

これらの中では、携帯電話の就学前の使用開始率は1割に満たず、非常に低く、携帯電話が使用開始時期の遅い情報メディアであることがわかる。

また、携帯電話の使用開始に関しては、進学・進級のタイミングで使用開始率が大きく上昇するのが顕著である。これは、進級のタイミングで親に買い与えられることに加えて、携帯電話が人と人との間で使われるコミュニケーションツールであるという本来の役割として、進学・進級が新しい環境や対人関係や**コミュニティ**が広がるタイミングでもあることが影響していると考えられる。

情報機器の利用状況

次に、これらの情報機器を用いた1日の行動や**生活習慣**を資料2-3-27で確認してみる。

1日のうち1時間以上時間を費やしている行動としては「テレビ視聴」が最も多く、子ども全体で82.2%となっており、これに「家族との会話」46.2%、「勉強」45.5%、「友達と遊ぶ時間」36.9%といった日常の行動が続く。

「テレビ視聴」については、小中高別に見ても大きな差は見られないが、「家族との会話」「友達と遊ぶ時間」は、小中高と学年が上がるごとに減少する傾向にある。

反対に、小中高と学年が上がるごとに上昇する傾向にあるのは「インターネット」「携帯電話」の使用時間である。特に小学生と中学生の間での差が大きく、この間の生活の変化が大きいことが読み取れる。

さらに高校生では、「携帯電話」「インターネット」の1時間以上利用率が約38.3%、33.8%と高くなっており、インターネットや携帯電話の日々の生活の中で占める割合が高くなっていることがわかる。

「ゲームをする」「友達と遊ぶ」という行動は、小中高と、学年が上がるにつれて1日に「ほとんどしない」という割合が増えているが、一方で「インターネット」「携帯電話」を使わない日というものが稀になっていく傾向にある。

特に高校生では「携帯電話をほとんど使わない」とする者はわずか2.8%となっており、高校生においては携帯電話が非常に生活に密着した**パーソナルメディア**となっている。

これらの傾向をまとめると、学年が上がるごとに友達との対面した**リアルなコミュニケーション**は減り、携帯電話やインターネットなどを介した**バーチャルなコミュニケーション**が増え

ているということがわかる。

携帯電話の役割

パソコンと携帯電話の使い分け

パソコンと携帯電話に共通して行なえる機能の利用状況について、各シチュエーションで「パソコン・携帯電話どちらを使うか」と質問したものをまとめたのが資料2-3-28である。

「どちらも同じくらい」という回答は少なく、「パソコン」は調べもの、「携帯電話」はメールといった役割でパソコンと携帯電話の役割が明確に分けられている。

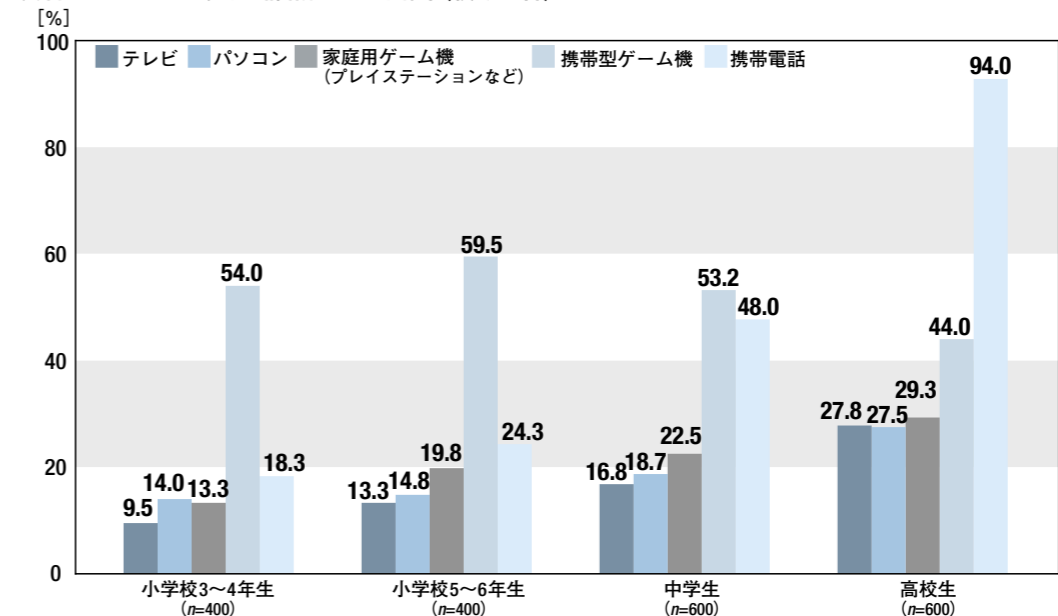
また、「新譜などの楽曲視聴」についてはどちらかというところ携帯電話にその役割が担われている。

ブログ・SNSでのパソコンと携帯電話の使い分け

ブログやSNSの利用状況を尋ねたところ、利用率は全体の10.5%であった。「ブログやSNSで日記などを書いているか」という質問に対しては、利用者の8割が「書いている」と回答した。

閲覧や書き込みの媒体としては、74.3%がパソコンのみで利用していると回答しており、パソコン・携帯電話の両方を使うとする者は15.2%、携帯電話のみで利用しているの

資料2-3-25 自分専用の情報機器の保有率(複数回答)



出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」

参考資料

クロスリファレンス

- 生活習慣
→ 2-1-1
- コミュニケーション
→ 2-1-3
- SNS
→ 2-1-2
→ 2-2-4

資料2-3-26 使用開始時期(単回答)

(1) テレビ [%]

	回答数	就学前 (幼稚園 など)	小学校 1年生	小学校 2年生	小学校 3年生	小学校 4年生	小学校 5年生	小学校 6年生	中学校 1年生	中学校 2年生	中学校 3年生	高校 1年生 以降
小学校3～4年生	368	87.5	6.3	3.0	1.6	1.6	0	0	0	0	0	0
小学校5～6年生	368	83.2	4.6	0.5	4.1	3.5	3.3	0.8	0	0	0	0
中学生	570	74.6	4.6	0.9	1.6	2.1	3.3	5.6	4.7	1.8	0.9	0
高校生	578	66.1	3.5	1.4	2.8	3.3	1.7	2.4	5.9	2.4	1.7	8.8

(2) パソコン [%]

	回答数	就学前 (幼稚園 など)	小学校 1年生	小学校 2年生	小学校 3年生	小学校 4年生	小学校 5年生	小学校 6年生	中学校 1年生	中学校 2年生	中学校 3年生	高校 1年生 以降
小学校3～4年生	341	42.2	20.5	15.5	15.5	6.2	0	0	0	0	0	0
小学校5～6年生	356	25.6	14.9	11.0	17.4	17.1	10.7	3.4	0	0	0	0
中学生	562	11.7	5.5	6.8	11.2	14.1	19.2	14.1	13.5	3.2	0.7	0
高校生	574	8.2	2.1	1.6	6.6	8.9	14.6	12.0	19.5	8.7	7.3	10.5

(3) 家庭用ゲーム機 [%]

	回答数	就学前 (幼稚園 など)	小学校 1年生	小学校 2年生	小学校 3年生	小学校 4年生	小学校 5年生	小学校 6年生	中学校 1年生	中学校 2年生	中学校 3年生	高校 1年生 以降
小学校3～4年生	262	47.3	30.5	12.2	8.0	1.9	0	0	0	0	0	0
小学校5～6年生	292	34.9	16.8	12.3	19.9	7.9	6.8	1.4	0	0	0	0
中学生	472	24.6	16.9	7.4	18.2	12.5	9.3	6.6	3.8	0.6	0	0
高校生	481	21.0	16.8	6.2	11.6	10.2	9.4	5.4	9.6	4.8	1.9	3.1

(4) 携帯型ゲーム機 [%]

	回答数	就学前 (幼稚園 など)	小学校 1年生	小学校 2年生	小学校 3年生	小学校 4年生	小学校 5年生	小学校 6年生	中学校 1年生	中学校 2年生	中学校 3年生	高校 1年生 以降
小学校3～4年生	316	22.8	27.2	23.7	20.9	5.4	0	0	0	0	0	0
小学校5～6年生	341	20.2	16.7	13.5	20.5	14.4	12.6	2.1	0	0	0	0
中学生	514	20.2	15.0	9.3	19.5	14.0	8.8	7.0	3.9	1.6	0.8	0
高校生	463	16.4	14.5	8.2	15.1	14.3	9.7	5.4	6.5	3.2	1.7	5.0

(5) 携帯電話 [%]

	回答数	就学前 (幼稚園 など)	小学校 1年生	小学校 2年生	小学校 3年生	小学校 4年生	小学校 5年生	小学校 6年生	中学校 1年生	中学校 2年生	中学校 3年生	高校 1年生 以降
小学校3～4年生	73	5.5	21.9	11.0	34.2	27.4	0	0	0	0	0	0
小学校5～6年生	97	2.1	5.2	3.1	8.2	21.6	35.1	24.7	0	0	0	0
中学生	288	0.3	0.7	0	2.8	4.2	12.2	17.7	36.1	16.0	10.1	0
高校生	564	0.2	0.5	0.2	0.9	1.4	2.7	5.9	14.9	14.2	15.6	43.6

出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」

は10.5%と、携帯電話経由のブログ・SNSの利用者は合計25.7%であった。

以上のことから、子どもにおけるブログ・SNSの利用は、現状としては、パソコン経由での利用がメインであると言える。

携帯電話でのコミュニケーション

携帯電話と子どもたちの人間関係

子どもの携帯電話の保有率が年々上昇する中で、子どもたちの人間関係において携帯電話はどのような位置付けにあるのか。

資料2-3-27 1日当たりの行動

(1) 1日当たりの1時間以上(計)の行動(単回答)

	テレビ視聴		インターネット		ゲーム		勉強		家族との会話		友達と遊ぶ時間		携帯電話	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
全体	1,884	82.2	1,833	29.1	2,000	26.6	2,000	45.5	2,000	46.2	2,000	36.9	1,022	27.6
小学校3～4年	368	81.8	341	21.7	400	25.0	400	23.8	400	66.5	400	57.3	73	0
小学校5～6年	368	86.1	356	25.6	400	32.3	400	34.8	400	56.5	400	48.8	97	7.2
中学生	570	81.2	562	31.1	600	27.5	600	59.0	600	38.7	600	22.8	288	20.5
高校生	578	81.0	574	33.8	600	23.0	600	53.5	600	33.2	600	29.5	564	38.3

(2) 1日にほとんど行動しない(単回答)

	テレビ視聴		インターネット		ゲーム		勉強		家族との会話		友達と遊ぶ時間		携帯電話	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
全体	1,884	2.0	1,833	27.2	2,000	31.0	2,000	9.9	2,000	1.8	2,000	22.2	1,022	11.7
小学校3～4年	368	1.1	341	46.6	400	22.5	400	5.0	400	0	400	9.3	73	50.7
小学校5～6年	368	0.5	356	35.4	400	21.5	400	6.3	400	1.0	400	12.8	97	38.1
中学生	570	2.8	562	18.0	600	32.3	600	7.5	600	2.3	600	31.7	288	10.4
高校生	578	2.6	574	19.7	600	41.5	600	17.8	600	2.8	600	27.7	564	2.8

出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」

資料2-3-28 パソコンと携帯電話の使い分け(単回答)

	パソコン	携帯電話・PHS	どちらも同じくらい使う	どちらもあまり使わない
メール	7.0	82.0	6.1	4.9
ゲーム	35.4	23.6	9.1	31.9
オンラインショッピング	30.5	2.4	2.6	64.4
新譜などの音楽視聴	26.4	34.1	5.3	34.1
お天気を調べる	38.0	22.6	3.3	36.1
乗換を調べる	39.3	12.7	2.9	45.0
地図を調べる	48.6	8.4	2.5	40.4
お店を調べる	42.9	8.7	2.7	45.7
調べもの	75.0	7.1	3.6	14.4

出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」

資料2-3-29に「新しく友達ができた時に知らせる情報」をまとめた。

「自宅の電話番号」「携帯電話の電話番号」「携帯電話のメールアドレス」「PCのメールアドレス」の4つを比較すると、「携帯電話の電話番号」「携帯電話のメールアドレス」を知らせるとする者が中学生では7～8割、高校生では8～9割と高くなっており、新しい対人関係を広げていく時に携帯電話というツールが不可欠であることを反映している。

また、携帯電話の電話番号とメールアドレスを比較すると、特に中学生・高校生で「メールアドレス」が「電話番号」を10%近く上回っている点から見て、「メールアドレス」が子ども同士のつながりを構築する際にいかに大きな役割を果たしているかがわかる。

さらに同調査では、子どもたちの電話帳登録件数の平均も算出している。小学校3～4年生が平均15件、5～6年生が平均19件、中学生が48件、高校生が72件と、小中高と学年が上がるごとに、登録件数が倍数で増えている。

こういった数字から見て、対人関係の広がりを携帯電話の電話帳が反映している側面があると考えられる。

通話とメールの比較

1日当たりの通話とメールの利用状況を比較すると資料2-3-30のとおりである。「通話をほとんどしない」とするのは小中高といった学年にかかわらず6～7割と多く、通話はあまり利用されていない。

一方、メールの利用状況を見ると、通話の傾向とは異なり、小中高で差が大きい。「ほとんどしない」とするのが、小学校3～4年生で6割、5～6年生で4割、中学生では1割、高校生ではわずか2.7%となり、学年が上がるにつれ「ほとんどしない」とする者は少なくなり、高校生ではメールがいかに日々利用されているかがわかる。

またそれは、資料2-3-31の「連絡がない時の気持ち」の数字にも明らかに表われており、小中高にかかわらず、「メールが来ないと寂しい」は「電話が来ないと寂しい」の約2倍となっている。

さらに、「大事な用件を電話とメールのどちらで伝えるか」という質問に対しては(資料2-3-32)、小学校3～4年生では電話53.4%、メール9.6%であるのに対し、高校生では電話37.8%、メール56.0%となっており、学年が上がるほど、主なコミュニケーション手段として電話よりメールの位置付けが高くなっている。

携帯電話メールのやり取りを加速するもの

携帯電話の影響

資料2-3-33に子どもの携帯電話利用意識をまとめた。

小中高にかかわらず、「携帯電話は楽しい」という意識が7割以上と高く、さらに小中高と学年が上がるほど「楽しい」とする者が多くなっている。

また、「携帯電話がないと不便」という意識も上記と同様の傾向で、子どもでは全般的に「携帯電話は便利で楽しいもの」と認識されていることがわかる。

さらに、「手持ち無沙汰になると携帯電話を見てしまう」「携帯電話がないと不安だ」などの項目に対しては、中学生以上でその意識が高く、特に高校生では「手持ち無沙汰になると携帯電話を見てしまう」が6割、「携帯電話がないと不安だ」が7割と、楽しく便利だけでなく、携帯電話というツールへの依存傾向が表われている。

子どもにとっての「携帯電話メール」

子どもにとって携帯電話は「楽しくて便利なもの」という意識がほぼ共通であることは前述のとおりである。

しかし一方で、「携帯電話メールが面倒なことがある」とする意識が、子どもたちの中で芽生え始めている(資料2-3-34)。

中学生では56.9%、高校生では55.0%の子どもが、「携帯電話メールが面倒なことがある」としており、携帯電話メールに何かしらのプレッシャーを感じていることが推察される。

では、子どもたちは携帯電話メールをどのように使っているのだろうか。

そもそも、メールは自分が送信しているよりも「受け取っているほうが多い」という認識が全般的に強い(資料2-3-35)。

そして、受信したメールへの返信態度としては、小中高にかかわらず、「なるべく早く返信するようにしている」とする者が7～8割と、子どもの携帯電話メールのやり取りにおいては「早い返信が常識である」という風潮がある(資料2-3-36)。このような意識が、「メールが面倒くさくなる」という気持ちの背景にあると推察される。

30分ルールの実態とその背景

次に、返信間隔で「この時間以内に返信が来ないと遅い」と思う、メール返信間隔について聞いた結果を資料2-3-37にまとめた。

結果を見ると、小中高にかかわらず「30分以上」が8割を

超えており、子ども同士のメールのやり取りにおいては、30分以内の返信が常識という、いわゆる「30分ルール」という、子どもの独自ルールが確立されていると考えられる。

また、「相手の返信スピード」についての質問では、「ほぼ同じようなタイミングで返信が来ていると思う」「相手の返信タイミングのほうがやや早いと思う」という回答が多く、自分が十分に相手より早く返信していると思っている者がわずかであることがわかる(資料2-3-38)。

一方で、「相手から返信がない」ことに対して相手が怒っているかどうか気になるかという点について聞くと、「気にならない」「どちらでもない」とする者が大半であり(資料2-3-39)、子

どもたちは返信の有無についてはそれほど気にしていないことがわかる。

以上のことから、この「30分ルール」成立の背景を総合的に分析すると、やり取りを加速しているのは、子どもがお互いに「相手からの返信スピードが早い」と認識していることであり、そして、メールのやり取りにおいては、内容や相手からの返信を期待する気持ちよりも、むしろ「自分が送った」ということ自体に意義を感じているということが背景にあると考えられる。子どもたちは、この「送る」という行為で自分の存在を主張していると考えられるのではないだろうか。

資料2-3-29 新しく友達ができた時に知らせる情報(単回答)

[%]

	回答数	自宅の電話番号	携帯電話の電話番号	携帯電話のメールアドレス	PCのメールアドレス
小学校3～4年生	73	34.2	32.9	32.9	13.7
小学校5～6年生	97	46.4	49.5	49.5	14.4
中学生	288	30.2	75.3	84.4	27.4
高校生	564	17.0	80.7	90.1	24.1

出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」

資料2-3-30 通話vsメールの1日当たりの利用状況(単回答)

[%]

	回答数	2時間以上		1～2時間未満		30分～1時間未満		5～30分未満		ほとんどしない	
		通話	メール	通話	メール	通話	メール	通話	メール	通話	メール
小学校3～4年生	73	0	0	1.4	1.4	0	0	31.5	39.7	67.1	58.9
小学校5～6年生	97	0	0	1.0	1.0	1.0	5.2	34.0	54.6	63.9	39.2
中学生	288	0	3.1	0.3	6.3	3.1	24.7	24.0	56.6	72.6	9.4
高校生	564	0.9	8.2	0.5	10.8	5.3	28.2	35.3	50.2	58.0	2.7

出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」

資料2-3-31 通話vsメール依存度(1) 連絡がない時の気持ち

[%]

	回答数	電話が来ないと寂しい	メールが来ないと寂しい
小学校3～4年生	73	15.1	24.7
小学校5～6年生	97	26.0	42.3
中学生	288	26.8	59.0
高校生	564	41.7	71.1

出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」

資料2-3-32 通話vsメール依存度(2) 大事な用件の伝達手段 [%]

	回答数	大事な用事はメールより電話で伝える	大事な用事は電話よりメールで伝える
小学校3～4年生	73	53.4	9.6
小学校5～6年生	97	54.6	25.8
中学生	288	42.7	46.2
高校生	564	37.8	56.0

出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」

資料2-3-33 携帯電話利用意識(複数回答) [%]

	回答数	携帯電話は楽しい	携帯電話がないと不便	手持ち無沙汰になると携帯電話を見てしまう	携帯電話がないと不安だ	親など家族との会話が増えた	友達との会話が増えた
小学校3～4年生	73	78.1	56.2	21.9	20.5	30.1	24.7
小学校5～6年生	97	85.6	72.2	32.0	38.1	30.9	43.3
中学生	288	92.7	83.0	49.3	51.0	31.6	56.3
高校生	564	93.3	94.1	62.8	70.2	30.3	61.5

出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」

資料2-3-34 携帯電話メールが面倒だと感じることもあるか(単回答) [%]

	回答数	とてもそうだと思う	まあそう思う	あまりそう思わない	全然そう思わない	「そう思う」計
小学校3～4年生	73	9.6	26.0	39.7	24.7	35.6
小学校5～6年生	97	5.2	42.3	39.2	13.4	47.4
中学生	288	7.3	49.7	35.4	7.6	56.9
高校生	564	6.4	48.6	36.7	8.3	55.0

出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」

資料2-3-35 携帯電話メール受信意識(単回答) [%]

	回答数	受け取っているほうが多い	送るほうが多い	どちらも同じくらい
小学校3～4年生	30	43.3	6.7	50.0
小学校5～6年生	59	55.9	8.5	35.6
中学生	261	53.6	10.0	36.4
高校生	549	54.3	6.9	38.8

出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」

資料2-3-36 携帯電話メール返信態度(単回答) [%]

	回答数	何を聞いてもすぐ返信するようにしている	なるべく早く返信するようにしている	時間ができた時に返信しようと思っている	早く返信することをあまり意識したことがない
小学校3～4年生	30	3.3	83.3	6.7	6.7
小学校5～6年生	59	6.8	64.4	22.0	6.8
中学生	261	7.3	80.1	10.7	1.9
高校生	549	6.9	80.9	10.4	1.8

出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」

資料2-3-37 これ以上だと返信が遅くなると思う携帯電話メール返信間隔 [%]

	回答数	1分以上	10分以上	30分以上	1時間以上	3時間以上	6時間以上	特にない
小学校3～4年生	30	0	56.7	86.7	93.3	96.7	96.7	3.3
小学校5～6年生	59	5.1	62.7	83.1	91.5	91.5	91.5	8.5
中学生	261	13.0	58.6	82.8	92.7	94.6	95.4	4.6
高校生	549	12.4	65.6	86.5	93.1	95.1	95.6	4.4

出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」

資料2-3-38 相手のメール返信スピード実感(単回答) [%]

	回答数	相手の返信タイミングのほうがやや早いと思う	ほぼ同じようなタイミングで返信が来ていると思う	自分の返信タイミングのほうがやや早いと思う
小学校3～4年生	30	26.7	60.0	13.3
小学校5～6年生	59	17.0	81.4	1.7
中学生	261	22.6	70.9	6.5
高校生	549	16.2	76.5	7.3

出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」

資料2-3-39 自分の送ったメールに返信がない時の気持ち(単回答) [%]

	回答数	特に気にならない	どちらでもない	怒らせてしまったのではないかと不安になる	「怒っているかどうかは気にならない」計
小学校3～4年生	30	36.7	56.7	6.7	93.3
小学校5～6年生	59	37.3	44.1	18.6	81.4
中学生	261	28.4	44.1	27.6	72.4
高校生	549	27.7	46.6	25.7	74.3

出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」



Part 2 Personal / 個人
Chapter 3 Children / 子ども

2-3-4 Various Issues on Children with Mobile Phone

携帯電話を手にした子どもたちの諸問題

携帯電話利用に関する子どもの悩み

親から見た子ども同士の携帯電話でのコミュニケーション

親は子どもの携帯電話のコミュニケーションをどう捉えているのだろうか。資料2-3-40のように、親としては、子どもに携帯電話を持たせたことによって「いつでも連絡が取れて安心だ」という認識が強い。また、中学生、高校生の親の8割以上が、「子ども自身は携帯電話での友達とのやり取りを楽しんでいる」と捉えている。

しかし、子どもは親から見えないところで、携帯電話でのやり取りにトラブルなどを生じさせてはいないのだろうか。

ここからは、全国で行なった「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」に加え、**子ども目線**での携帯電話を見るために、最も子どもに近いところにいる、小学校、中学校、高校の**学校教師**を対象に行なったアンケート「学校教諭調査」も併せて、子どもの携帯電話の利用の課題を確認したい(調査時期については章末の資料を参照)。

資料2-3-40 親から見た子どもの携帯電話利用についての意識 [%]

	回答数	いつでも連絡が取れて安心	家族とのコミュニケーションが活発になった	子どもとの会話が増えた	子どもとのメールが楽しい	友達とのやり取りが楽しそう
小学校3～4年生	73	97.3	60.3	28.8	50.7	30.1
小学校5～6年生	97	92.8	62.9	30.9	54.6	48.5
中学生	288	91.7	61.5	31.9	42.4	83.0
高校生	564	93.3	62.9	30.3	42.2	85.3

出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」

資料2-3-41 生徒からの携帯電話に関する相談の有無(単回答) [%]

	回答数	ある	ない
小学校	100	19.0	81.0
中学校	100	34.0	66.0
高校	100	40.0	60.0

出所：「学校教諭調査」

教育の現場で挙がる相談

実際、教師の立場で「子どもから携帯電話に関する相談を受けた」とする者は、資料2-3-41のとおり、小学校教師で19.0%、中学校教師で34.0%、高校教師で40.0%である。これらの結果から見て、少なからず子どもたちが携帯電話に関するトラブルを抱えていることがわかる。

その相談内容は資料2-3-42のとおりである。小学生や中

学生では、携帯電話が欲しいが買ってもらえないなどの相談が4割弱と多い。

中学生では、「親が携帯電話を買ってくれない」「携帯電話を持っていないことで疎外感を感じる」などの悩み以外に、携帯電話で**いじめ**に遭っているという悩みも4割と多くなり、携帯電話メールのやめ時がわからないといったメールの悩みが2割、さらには「携帯のブログに悪口を書かれた」などの相

資料2-3-42 生徒からの携帯電話に関する相談内容(複数回答) [%]

	回答数	親が携帯電話を買ってくれない	携帯電話を持っていないことで疎外感を感じる	携帯電話を貸してくれと友達がつっこい	不当料金請求が来た	ダウンロードをしすぎて料金が跳ね上がった	出会い系サイトで会った相手がしつこく連絡してくる	携帯電話メールを利用したいいじめに遭っている	携帯電話メールやり取りがやめられない(返信をやめると冷たい人間だと思われそうで怖い)	携帯電話を紛失してしまった	知らない人からのメール、広告メールなどの迷惑メールが来る	その他
小学校	19	36.8	10.5	0	0	26.3	10.5	15.8	0	15.8	15.8	31.6
中学校	34	35.3	17.6	5.9	14.7	11.8	8.8	41.2	23.5	11.8	26.5	17.6
高校	40	5.0	5.0	0	40.0	17.5	7.5	27.5	12.5	35.0	25.0	20.0

「その他」の内訳

学校区分	回答内容
小学校	学校に持ってきたい。
	安全のため、学校に携帯電話を持ってきたい。
	今日は親戚の家に帰らないといけなが連絡のために携帯を持ってきたからかけてよいか。
	塾にそのまま行くので、帰りの連絡をするためにも当日だけは許可してほしい。
中学校	携帯の持参を許可してほしい。
	なぜ学校に携帯電話を持ってきてはいけないのか？
	学校に携帯電話を持ってこなければならない時、どうすればいいのか？
	携帯のブログに悪口を書かれた。 友人とのメールのやり取りでトラブルが生じている。
高校	携帯電話を学校でも認めてほしい。
	登下校時に危険なので、持たせてほしい。
	登下校時に危険なので、防犯用として所持したい。
	友人とのトラブル(メールでの誹謗中傷)、携帯電話のブログでのトラブル。
	サイトに自分の悪口の書き込みがある。
	ホームページやブログの中傷文。
	ケータイが盗難に遭った。
使いすぎて料金が支払えない。	

出所：「学校教諭調査」

参考資料

クロスリファレンス
●学校
→ 3-3-4

談も持ち上がり、携帯電話でのトラブルが多岐にわたっている様子がわかる。

高校生では、中学生とは異なり、保有・非保有に関する悩み相談は少なく、「不当料金請求が来た」40.0%、「携帯電話を紛失してしまった」35.0%、「携帯電話メールを利用したいじめに遭っている」27.5%と、トラブルや悩みが多く挙がっている。

学校と携帯電話

学校への携帯電話持ち込み許可状況

資料2-3-43に学校への携帯電話の持ち込み許可状況をまとめた。高校になると「全面的に許可」31.0%、「条件付きで許可」39.0%と計7割が「許可」としているが、小学校、中学校では許可が2割にとどまり、禁止となっているケースが多い。

さらに、中学校では「許可していない」が76.0%という明確な方針ができて一方、小学校では「特に何の指示もしていない」が26.0%と、携帯電話利用ルールに関して未整備な部分が多いことがわかる。

資料2-3-43 学校内への携帯電話持ち込み許可状況(単回答) [%]

	回答数	全面的に持ち込みを許可している	条件付きで許可している	許可していない	特に何の指導もしていない	「許可している」計
小学校	100	1.0	22.0	51.0	26.0	23.0
中学校	100	6.0	17.0	76.0	1.0	23.0
高校	100	31.0	39.0	23.0	7.0	70.0

出所：「学校教諭調査」

資料2-3-44 生徒とのホットライン(単回答) [%]

	回答数	プライベートの電話番号を知らせている	学校支給の電話番号を知らせている	プライベートのメールアドレスを知らせている	学校支給のメールアドレスを知らせている	知らせていない
小学校	100	18.0	0	5.0	3.0	74.0
中学校	100	30.0	1.0	10.0	2.0	57.0
高校	100	34.0	2.0	18.0	4.0	42.0

出所：「学校教諭調査」

生徒とのホットライン

次に、先生と生徒を結ぶホットラインとして携帯電話が機能しているかという視点で携帯電話を見てみる。資料2-3-44のとおり、教師が自分の携帯電話の番号やメールアドレスを生徒に教えているかという質問では、小学校教師は「何も知らせていない」が約7割と、知らせていないケースが多い。

一方、中学校、高校の教師では「プライベートの電話番号を知らせている」という者が3割強、「プライベートのメールアドレスを知らせている」が1割以上と、生徒との連絡用に自主的にプライベート用の携帯電話を活用している者もいることがわかった。この数字から、少なからず携帯電話が生徒とのホットラインとして機能していることがわかる。

携帯電話に関する子どもたちの悩み解決に向けて

携帯電話の授業実施の有無

パソコンと携帯電話の授業の実施状況を対比したのが資料2-3-45である。パソコンの授業は小中高にかかわらず実施率が9割以上であり、授業の内容としては、実際にパソコン

の授業を行なっている教師へのアンケートによると、主に「インターネットの使い方」や「メール」の使い方などである。一方で同じような機能を持つ携帯電話の授業は、中学校で16.0%という実施率ではあるものの、小学校、高校では実施率が10.0%未満と著しく低い。

この実施率から見て、携帯電話の使い方について学校側で特に積極的な取り組みがなされていない現状がわかる。

携帯電話の教育の必要性

今現在は実施率の低い携帯電話の教育であるが、今後の必要性という点では、資料2-3-46のように、小中高にかかわらず教師の7割以上が「必要だと思う」「必要になるかもしれない」と必要性を感じており、特に中学校では38.0%、高校では36.0%が「必要である」と確信を持って答えており、必要性を感じている強さが顕著に表われている。

学校側ですべきこと

では、学校側として携帯電話についてどのように取り組む

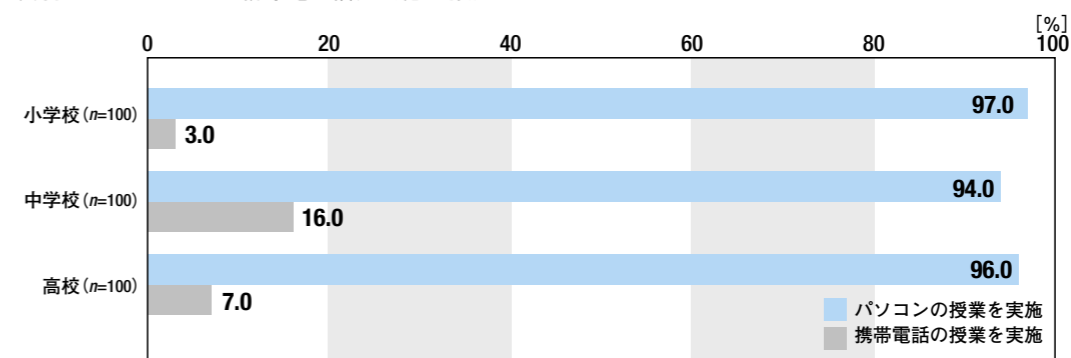
べきだろうか。現在の子どもたちのマナー遵守状況を親世代と比較してみると、「歩いている時にメールしない・電話しない」などのマナーについては、むしろ小学生のほうが遵守できている面があり(資料2-3-47)、マナーについては家庭での教育などである程度実施できている部分も大きいと考えられる。

このようなこともあり、学校教諭調査のフリーアンサー集計では、今後取り組むべきはモラル教育であるという意見が多く挙がった(資料2-3-48)。

掲示板やチャットへの書き込みの言いたい放題で無責任な言葉が横行し、メールやチャットなどから発生するいじめが少なくない。

そのような時代の流れを受けて、小学校の情報の授業では、ネット上のエチケットを学ぶカリキュラムが生まれ始めている。今後はさらに社会的ケアとして、学校では、モラルに重点を置いた指導をしていく必要が強まっていくのではないだろうか。

資料2-3-45 パソコン・携帯電話授業実施の有無



出所：「学校教諭調査」

資料2-3-46 携帯電話授業の必要性(単回答) [%]

	回答数	必要だと思う	必要になるかもしれない	現状で十分だ	必要ないと思う	「必要」計
小学校	100	17.0	56.0	11.0	16.0	73.0
中学校	100	38.0	34.0	6.0	22.0	72.0
高校	100	36.0	40.0	3.0	21.0	76.0

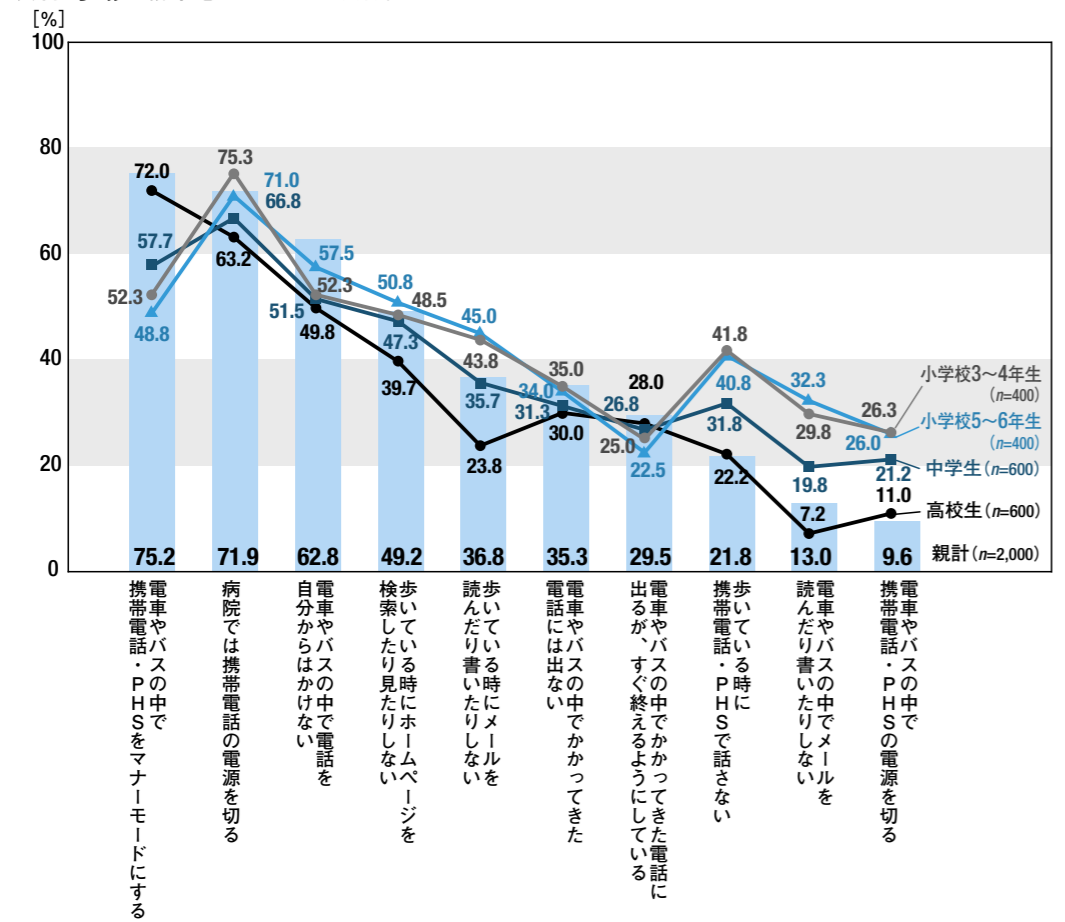
出所：「学校教諭調査」

参考資料

クロスリファレンス

- ルール
→ 2-3-2
→ 3-4-1
- 社会的ケア
→ 3-3-3

資料2-3-47 携帯電話マナーの実践度



出所：「子どもの携帯電話利用に関する親子調査」

資料2-3-48 使用に当たっての教育の必要性

学校区分	携帯電話に関する教師の意見
小学校	<p>子どもたちは、携帯電話でメールをやり取りし、「電話」としての機能をほとんど使わない。「話す」のではなく、「打つ」のである。掲示板やチャットへの書き込みは、顔が見えていない分、言いたい放題。無責任な言葉、誹謗中傷も当たり前といった状況だ。最近では、メールやチャットなどから発生するいじめが少なくない。そんな時代の流れを受けて、小学校の情報の授業では、ネット上のエチケットを学ぶカリキュラムが組まれている。今後も、モラルに重点を置いた指導をしていく必要がある。</p> <p>小学校低学年なので、まだ持っている子は少ないようだ。家庭の事情などで何とも言えない部分があるが、持たせる場合は、親が使い方などを教える必要があろう。</p>
中学校	<p>携帯電話は、あの年代の生徒にとって、非常に刺激の強い製品です。目の前の人間よりメールの人間、何でも気軽にメールで呼びかけ、と確かに弊害もあります。だからといって、やみくもに禁止するのではなく、使い方をともに考えていくという姿勢が必要かと思われます。</p> <p>携帯やPCからの掲示板への書き込みが多いらしい。特定の人物への中傷もあれば、自分の写真付きプロフィールを載せる生徒も。ネチケットとネットの危険性を教えていかないといけないと思う。</p> <p>マナーを教える場がなく、非常に悪い。コミュニケーションの能力が低下。</p> <p>メールによる誤解がいじめ発生の原因になったり、出会い系サイトなどによる事故など、未成熟な子どもが使うには問題点が多い。保護者はただ与えるだけでなく、使い方などを指導すべきである。</p> <p>リテラシー教育が必要。</p> <p>今後使い方についての指導がかなり必要になる。</p> <p>利用方法を家庭でしっかり教えてほしい。</p> <p>原則的には、中学生が携帯を持つことには、反対です。持っていれば、携帯の利用に関するモラルをわかまえるような指導をしたいと思っています。</p> <p>1年生を担当しているが、40%の生徒が所持している。小学生の時から使っている子も多く、使用に慣れているが、反面トラブルも急増している。便利な機器ではあるが、携帯の使用が多い子は時間を取られるせいか、成績も伸び悩んでいることが多いような気がする。12月になって電話会社が主催するケータイ安全教室を実施した。正しい使い方やマナーを学んでほしいと思っている。</p>
高校	<p>TPOをわきまえた電話の使用が大切である。学生のモラルの低下が叫ばれるようになって久しいが、携帯が国民全部に認知された今だからこそ、使い分けできる人間を教育し、モラルのある生徒を社会に輩出したい。</p> <p>今の子どもたちは携帯電話がない頃のことを体験していないので、「全面使用禁止」ではなくTPOに合わせた使用方法というものを指導していきたい。</p> <p>未成年者が使用する携帯電話の機能を制限する法規制などが必要だと思うし、教育に関して言えば、携帯電話の弊害(悪影響)が極めて大きいことを保護者、教育行政関係者は認識すべきである。携帯電話が今の子どもをダメにしていると言っても過言ではない。</p> <p>マナーを心得ていない生徒が多い。きちんと携帯を使用するに当たってのマナーを教育する必要性を感じる。マナーを守ることができれば、携帯に関してルールを作る必要はない。</p> <p>禁止するよりもマナーを教えるべきではないかと考えている。しかし、生徒よりも保護者や社会一般のマナーの向上を考えなければならぬような気がする。使い方次第のものであり、一長一短であると強く感じる。</p> <p>学校で禁止しているのだが、ほとんどの生徒が持っているのを教師は知っており、教育的にはもはや携帯電話を禁止することは無理であり、その使い方を指導する必要があると思います。</p> <p>学校内でのルールも必要だろうし、それ以外に、携帯にまつわる危険を教えたり、人権教育も併せて伝えていくべきだと思う。何だかんだ言っても、そういう点では、子どもでもあるので。</p>

出所：「学校教諭調査」

子どもの携帯電話利用に関する親子調査

調査方法	Web調査		
調査地域	全国		
調査対象	小学校3年生～高校3年生の子どもとその親		
	●サンプル構成		
	小学校3～4年生とその親	400組	
	小学校5～6年生とその親	400組	
	中学校1～3年生とその親	600組	
	高校1～3年生とその親	600組	

調査時期 2006年12月

有効回答数 2,000組

調査項目

- * 携帯電話保有状況
- * 保有開始時期ときっかけ
- 親**
- * 子どもの利用を危惧している機能
- * フィルタリング機能利用状況
- * (自身の) 携帯電話マナー実践状況
- 子ども**
- * 携帯電話購入重視点
- * 機能利用状況
- * 親に利用を注意されている機能
- * メール利用状況
- * メールのやり取りに関する意識
- * SNS／ブログ利用状況
- * 生活実態／情報メディア接触状況
- * 携帯電話マナー実践状況

子どもの学年(長子)

	回答数	%
小学校3年	207	10.4
小学校4年	193	9.7
小学校5年	191	9.6
小学校6年	209	10.5
中学校1年	189	9.5
中学校2年	209	10.5
中学校3年	202	10.1
高校1年	200	10.0
高校2年	189	9.5
高校3年	211	10.6
全体	2,000	100.0

子どもの性別

	回答数	%
男性	1,003	50.2
女性	997	49.9
全体	2,000	100.0

居住地域

	回答数	%
北海道	86	4.3
青森県	25	1.3
岩手県	21	1.1
宮城県	36	1.8
秋田県	13	0.7
山形県	10	0.5
福島県	30	1.5
茨城県	32	1.6
栃木県	17	0.9
群馬県	13	0.7
埼玉県	122	6.1
千葉県	86	4.3
東京都	185	9.3
神奈川県	150	7.5
山梨県	12	0.6
長野県	22	1.1
新潟県	25	1.3
富山県	11	0.6
石川県	15	0.8
福井県	15	0.8
岐阜県	32	1.6
静岡県	64	3.2
愛知県	165	8.3
三重県	46	2.3
滋賀県	18	0.9
京都府	26	1.3
大阪府	160	8.0
兵庫県	89	4.5
奈良県	22	1.1
和歌山県	11	0.6
鳥取県	9	0.5
島根県	11	0.6
岡山県	32	1.6
広島県	46	2.3
山口県	24	1.2
徳島県	17	0.9
香川県	21	1.1
愛媛県	16	0.8
高知県	11	0.6
福岡県	127	6.4
佐賀県	11	0.6
長崎県	22	1.1
熊本県	25	1.3
大分県	22	1.1
宮崎県	19	1.0
鹿児島県	16	0.8
沖縄県	12	0.6
無回答	0	0
全体	2,000	100.0

学校教諭調査

調査方法	Web調査		
調査地域	全国		
調査対象	小学校～高校の教諭(非常勤講師などは含まない)		
	●サンプル構成		
	小学校教諭	100名	
	中学校教諭	100名	
	高校教諭	100名	

調査時期 2006年12月

有効回答数 300名

調査項目

- * 学校への携帯電話持ち込み許可状況
- * 生徒からの携帯電話利用に関する相談を受けた経験の有無
- * 生徒から受けた携帯電話利用に関する相談内容
- * 携帯電話授業の必要性実感度

※ 比率(%)は、四捨五入による端数処理のため、合計が100にならない場合があります。

回答者属性

国立・公立・私立別		
	回答数	%
国立	5	1.7
公立(市立・区立など)	256	85.3
私立	39	13.0
無回答	0	0
全体	300	100.0

共学・男子校・女子校別

	回答数	%
男女共学	281	93.7
男子校	8	2.7
女子校	11	3.7
全体	300	100.0